



触ることを通して、見方や感じ方を広げる鑑賞教育の実践

2年生 榎原市立耳成西小学校 藤田 康平

1. はじめに

学習指導要領における「造形的な見方・考え方」の中の「造形的な視点」は、図画工作ならではの視点であり、材料や作品、出来事などを、形や色などの視点で捉えることである。その視点を大切に鑑賞活動することで、自分の見方や感じ方に広がりや深まりができる。そして、鑑賞の方法に「触る」行為を取り入れることで、児童が自らの体全体の感覚を働かせ、「造形的な見方・考え方」を豊かにしていく可能性があると考えられる。

このように本実践では石やでこぼこといった身近に溢れる事物を、造形的な視点を持って鑑賞する活動である。「触る」「造形的な見方・考え方」を複数の題材を貫くキーワードとして、縦断的に児童の様子を観察した。



2. 実践の概要

【題材名】
「でこぼこはっけん！」
B鑑賞(1)ア
【共通事項】(1)アイ

【目標】

- ・紙粘土で、でこぼこを写すときの感覚や行為を通して、いろいろな形や触った感じなどに気付く。
- ・身の回りにあるでこぼこの造形的な面白さや楽しさなどについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げる。
- ・いろいろな形や触った感じなどを基に、自分のイメージをもつ。
- ・楽しく紙粘土で、でこぼこを写し、形の面白さを味わう活動に取り組み、作りだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする。

3. 活動の内容・方法

関連題材1:「わたしのお気に入り」(1時間)

校内や学校周辺にある石を探し、「お気に入りの石」を見付ける。互いの石を触って鑑賞し、お気に入りの理由や特徴を伝え合う。

関連題材2:校区周辺から発見される土器の鑑賞

榎原考古学研究所附属博物館の学芸員を招き、土器を鑑賞する。土器への文様付けの方法を学び、紙粘土に文様となる素材を押し付ける。押し付ける素材の違いから表れる文様(でこぼこ)の違いを触って確かめる。

関連題材3:「でこぼこはっけん！」

(本時2時間)

身の回りのものからでこぼこを探し出し、紙粘土に形を写し取る。写し取った紙粘土に触って鑑賞し合い、感じたことを伝え合う。



4. 成果と課題

題材を積み重ねる中で、児童の「造形的な視点」や感性の高まりを感じることができた。

石や紙粘土を紹介する時間では、自分が感じたことを大切にしながら、話し合っている姿があった。それは、探し見つけたお気に入りの石やでこぼこに、児童が感性や想像力を働かせて、自分なりの意味や価値をつくり出したためであると考えられる。

また、紙粘土を並べたり分類したりすることで、でこぼこの共通性や違いに気付くことに加え、自分と友人との感じ方の違いに気付き鑑賞していた点は、「触ることを通して、見方や感じ方の広まり」が確認できる瞬間であると考えられる。



What is a painting? 触ってみるとさわって見る

1年生 奈良教育大学附属中学校 長友 紀子

1. はじめに

図画工作科と美術科の教科の目標に、共通する言葉として「感性」がある。「感性」は、様々な対象や事象から価値や心情を感じ取る力であり、知性と一体化して人間性や創造性の根幹をなすものとされる。小学生と中学生が協働して行う鑑賞活動は、年齢や経験の違いによる多様な見方や感じ方に触れる機会となり、子どもたちの価値観を広げ、創造的な思考を引き出すきっかけになる可能性があると思われる。本実践では、「触覚」というキーワードを手がかりに、子どもたちの「感性」を広げる学びの在り方を探っていく。

2. 実践の概要

【題材名】

「What is a painting?
触ってみるとさわって見る」
A表現(1)ア(2)ア B鑑賞(1)ア
【共通事項】(1)アイ

【目標】

- ・材料の質感や形などが感情にもたらす効果を理解し、材料や用具の生かし方を習得しながら意図に応じて工夫して表す。
- ・オノマトペから「触覚」について思考を深め、視覚や触覚などの感覚を働かせながら、創造的な構成を工夫し表現の構想を練る。
- ・創造活動の楽しさを味わい、異年齢の交流による多様な見方や感じ方を基にして、主体的に学習活動に取り組む。

3. 活動の内容・方法(中学校美術科)

第1次(2時間):中学生のみ

オノマトペを基に、「触れる」作品を制作する。4~5人のグループに分かれ、グループごとに1つのオノマトペをもらう。(オノマトペ:「つるつる」「ごつごつ」「くによくによ」「じゃりじゃり」「つんつん」「ふかふか」)作品は個人制作とし、同じオノマトペの友人と交流しながら制作を進める。

第2次(1時間):小学生と中学生

完成した作品を鑑賞する。小学生と中学生がペアになり、①中学生のおすすめ作品鑑賞、②小学生のお気に入り作品鑑賞を行う。鑑賞は手で触って行い、手で触って感じたことを互いに話し合う。



4. 成果と課題

中学生は、ペアになった小学生の顔を覗き込んで反応を見ていた。相手の視点に立ち、相手を感じていることを知ろうとしている様子が窺えた。小学生に、「手のひらで触ってみて」「どんな感じ?」と声をかけたり、小学生が「かたい」と言うと、「かたい?どんな感じ?」「チクチクする?」と話すなど、中学生は小学生の触覚を表す言葉を引き出そうとしたり言い換えたりしていた。「触覚」をキーワードにすることで、異なる年齢の子ども同様に感じたこと考えたこと共感が生まれた。この学習後の児童、生徒の様子を継続的に観察し、「感性」の広がる学びであったかを検討する必要がある。